

## メープルレター(4)

### ある夏の午後

モンリオールは夏もそろそろ終わりになりかけてきました。夏を探すほど、雨が多く、暑い日の少かったせいか、太陽がいっぱいの日は、お出かけです。マリーナで日曜の午後を船で静かに過ごすことになりました。

マリーナで夏を過ごすのは船だけではないようです。家族のように居ついているカルガモもここ1月間で雛からすっかり大人になりかけてきました。雄鴨は色気がでて、青や緑や美しい色がつき始め、優雅に船の間をぬって泳いでいます。雌鴨は、色気より食い気なのか、色は土色から変わらず(生物学的に当たり前なのでしょうが)ですが、あちこち畔りをつついては餌を漁っています。母鴨だけが忙しく先頭をきってリードしていきます。何だかわが家の風景です。

マリーナは、ウエストアイランドと言われる、サンルイ湖に沿った、モンリオール島の西の一角にあります。この湖の先にさらにもう1つデウモンターニュという湖が繋がっています。島の西側は、イギリス系(英語系)の人が多く英語が主に話されています。このマリーナは、エジンバラ公が名誉会長を務める由緒あるヨットクラブですが、モーターボートとヨットが半々位にメンバーとして停泊しています。ジュニアのヨット教室やヨットレースがあったり、様々な行事が行われます。船に乗りたくない人や暇を持て余す人たちはプールで泳いだり、テニスをしたりしています。クラブハウスもレストランやバーがあり、ゆっくり1日が過ごせるようになっていますが、船の好きな人は、船の手入れに余念がなく、人のざわめきを避け、ひっそりと船の中にいるようです。これも一味ある船の暮らし方かもしれません。

あらあら、隣のヨットに友達や子供達がどんどん集まってきました。今日は風が強いのでヨット日和なのでしょうか、救命具をしっかりとつけるといよいよ船出なようです。大丈夫なのでしょう、進んできた大きなカオス号とぶつかりそう。。ふー、やれやれ、どうにかカオスにならずに済みました。大人や子供を満載した小さなヨットに先を譲るとカオス号はそーっと引いていきます。

と、その時、その間をぬって満帆で30度に船体を傾けて走り抜けるヨットが一艘。しかも、たくましいイケメン二人が楫をとっています。

「あーこれはエキスパート。この瞬間に風向きを悟る早業とこの船のこなし。初めから満帆で出ていくなんて、完璧な風向きの計算だね。みごと。」と夫。

「あの満載ヨットはまだマリーナから出られそうもないわね。重すぎるのかしら。帆はあげないみたいよ。モーターボートと同じね。モーターで走っていくみたいよ。帆を張るのは難しそうでものね、素人だけでは。イケメンの船はもうはるか彼方よ。豆つぶみたいになってしまったわ。」

「まあね。男手が無いと大変かも。女性二人が中心で頑張ってはいるけどね。」

そうこうするうちに30分もしないうちに満載ヨットはモーターの音とともに、わいのわいの言いながら戻ってきたのでした。

風向きも綱の操作も、ヨットは一種の芸術のようなものかもしれません。南仏のリゾート地のようなマリーナも日暮れ時となり、水面に映る日の光が金の道を作る頃、帰路に着いたのでした。